別紙 2

審査の結果の要旨

1. 課程・論文博士の別: 論文博士
2. 申請者氏名: 緒方宏海（おがた　ひろみ）
3. 学位の種類: 博士（学術）
4. 学位記番号:
5. 学位授与年月日:
6. 論文題目:「中国黄海島嶼漁民の人類学―歴史・相互行為・外部環境」
7. 審査委員会委員名: 主査　東京大学　准教授　田原　史起
   教授　森山工
   准教授　阿古智子
   教授　渡邊日日
   京都大学　教授　太田出

[要旨]

本論文は、中国の黄海に浮かぶ島々である長山諸島の島嶼漁村を対象とし、著者自身の長期にわたるフィールド・ワークを通じてその歴史と現状に迫ろうとした貴重な民族誌の成果である。序論から結論までを含め 7 つの章で構成され、分量は参考文献一覧を含めて 250 頁、字数にして約 30 万字である。以下、各章ごとの内容を要約したうえで、審査結果について述べたい。

序論では本論の目的として、これまで周縁的な扱いを受けてきた島嶼に生きる人々の日常生活、とりわけ相互行為の特徴を、文化人類学の手法を用いつつも、彼らが歩んできた歴史と外部環境である国家や陸地本土との関係をも含めて理解することであるとする。そのうえで、①人文地理学、社会学、そして文化人類学からの「島嶼性」をめぐる論点が整理され、②費孝通の「差序格局」概念に代表される従来の中国社会論への批判的検討から、本論の仮題が導かれる。

第一章から第三章までは、対象地域である長山諸島の歴史を扱った章である。第一章では、清朝康熙帝から乾隆帝の時代にかけ山東省を中心とする大陸からの移民により長山諸島が一つの地域として形成された時期が扱われる。その過程で在地有力者である「公主」の下に一般漁民を従属させる「実供」制度や、海賊の襲撃に備える治安維持組織である「会」など独自の制度が生まれたとされる。

第二章では、長山諸島がロシアの支配を経て日本の植民地支配下に入った時期の漁業政策と島民の漁業経営の実態が明らかになる。とりわけ日本植民地当局が「実供」制度と富裕層の「漁覇」を利用し、漁業生産の安定と統治の安定化が図られた点が示される。

第三章では、中華人民共和国体制下に入り、共産党の入島により「実供」制度が解体され「漁覇」が打倒されたのちの、集団労働の下での漁業生産の実態が明らかになる。同時に、三反運動、大躍進、四清運動、文化大革命など建国後の諸運動を通じ、国家という島にとっての外部環境が、長山諸島の島嶼性を変化させていく様子が描かれる。

以上の歴史的展開を踏まえ、第四章と第五章では筆者自身のフィールド・ワークによる情報が駆使され、改革開放以降、現在に至る島嶼漁民の相互行為と村落政治の特徴が描き出される。第四章では現在の島の漁業経済や観光業の発展、それらに伴う若者の個人化、通婚圏、宗族、分家慣行の変化と世帯本位の暮らしの形成、そして近隣関係における女性同士の紐帯の重要性が明らかにされる。総じて、長山諸島では世代、性別、職業によって相互行為には異なる特徴がみられることが示されている。

第五章は、長山諸島の村々における「村民自治」についての考察である。まず大陸農村を対象とした「村民自治」をめぐる諸問題が提示されたあと、著者の主たるフィールドである「A 島」を舞台として、村落の政治生活が描かれる。村民委員会の選挙と候補者の同族的背景の分析、投票行動の観察を通じ、概して女性が政治的には消極的であるにも拘わらず、婦女主任が村民生活において果たしている多方面の役割が見出されている。総じて、島民は村幹部を信頼しており、安心して政治参加を行っており、各自は自身の利益最大化を追求することなく島の社会関係に配慮するという特徴があるという。

以上を踏まえ、結論では、①徐々に政治権力の下に統治へと取り込まれていった歴史、②世帯を単位として関係を選択しつつ、女性を重要な紐帯として展開する相互行為、そして、③個人化する若者の生成的な社会関係の三点にまとめて全体の議論を再整理している。

以上が本論文の概要であるが、その学術的貢献として、以下の三点を指摘できる。

第一に、本論文は、何をおいてもまず、島嶼漁村を対象とした希少な民族誌として高く評価できる。中国史・中国研究において、漁民にまつわる研究は少なからず存在するが、その大部分は太湖や銭塘江など大陸部の湖沼や河川流域の漁民を扱ったものであり、島嶼漁民を直接的な対象とした研究は非常に手薄であった。本論文は、島嶼漁村を定点観測地に定めた著者の、15 年に跨り総計 2 年間にも及ぶ粘り強いフィールド・ワークに基づいた貴重な観察の記録であり、今後において、世界各地の島嶼漁村研究にたいして比較の参照軸を提供する一次資料として大きな意義を有している。

第二に、本論文は、文化人類学の方法からスタートした著者が研究対象地域で地道なフィールド・ワークを行ったのみならず、当該地域の歴史的研究にまで踏み込み、歴史資料とフィールド・データを組み合わせ、清朝期から人民共和国期に跨る長期的なスパンで島嶼地域の形成過程とその社会的特質を描いたものであり、新しい地域研究の可能性を示すものとして評価できる。近年の傾向として、歴史研究者が対象地域においてオーラル・ヒストリーの収集を含むフィールド・ワークを行うことも増えているが、本論文はフィールド・ワーカーがそこで起こっていることのより深い理解のために当該地域の歴史研究にも踏み込むという新しい潮流の中に位置づけることができる。

第三に、島嶼性が歴史的に展開していく中で、漁民の社会関係がどのように変化し、現在ある姿に形成されたのかを、とりわけジェンダー関係を主軸として立体的に位置づけた点も、本論文の大きな特徴であり貢献である。本論によれば、島の男性らは父系のラインを通じて父から漁法を学び、多くの時間を海上で過ごし、自身の漁法や収入も他人には漏らさないというように個人主義的である。その一方で、彼らの妻である女性たちは島内に残り、実家のネットワークに全面的に頼りながら漁獲物の販売を担う。島内婚が一般的であることからも、父系血縁よりも姻戚関係が相対的に重要となる。また出稼ぎ労働者の世話をはじめとする村落ガバナンスにおいては、婦女主任を核とする女性同士の紐帯が大きく貢献している。これらの背景には、ナマコの養殖や観光業の発展により長山諸島の経済生活が陸地の農村に比してより豊かであり、その結果として若者たちも多く島内にとどまっている、といった事情も関わっている。陸地農村とは著しく異なるこれらの中国島嶼漁民の社会関係や生活実態は、本論文の独自の調査によって明らかにされたものである。

以上のようなメリットが明らかである一方、審査員からはいくつかの疑問点も提出された。例えば、①論文の言語表現においてこなれない文章表現や誤記が散見されること、②分析概念の面で、本論文の掲げる「相互行為」にまつわる先行研究が十分に踏まえられておらず、さらに本文中での相互行為(例えばモノのやり取りや会話など)に関する記述も物足らない印象があり、その結果、理論と実態を結ぶ「中間レベル」の分析が弱くなっている点、③フィールド・ワーカー自身とインフォーマントの関係も踏まえたうえでの、フィールド・データの持つ意味に対する吟味が不十分に見える点、などである。

以上のような問題点や粗削りな部分を抱えながらも、本論文は綿密かつ粘り強い現地調査に支えられた希少な中国島嶼漁村の民族誌であり、日本に近いにも拘わらず長く注目されてこなかった長山諸島を対象とした秀逸な地域研究である点に変わりはない。以上を総合的に考慮し、審査委員会は本論文が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。